

短期集中連載「第1回」

交通事故警察・司法の歪んだ捜査を斬る！取材文 柳原三佳

16歳少年白バイ衝突

「身内を愛媛県警の不当捜査」かばった



▲愛媛県警の白バイもフロント周りが大きく破損。警察官も右腕骨折の重傷を負った
▶大破したスクーターと昌樹さん。手足の複雑骨折で、長期の車椅子生活を送っていた

ジャーナリスト・柳原氏とともに、交通事故捜査の歪んだ実態を糾す今連載も3年目に突入。再開第1回は、白バイとの衝突事故で「加害者」に仕立て上げられた少年のケース。身内をかばい、事故状況を捏造する警察と、それを鵜呑みにする司法。逆転無罪までの闘いを追う。

「たった今、警察庁に質問状と再捜査願を渡しました。警察はデタラメな鑑定書や捜査報告書で勝手に事故状況を作り上げ、それを鵜呑みにした裁判官も息子に一方的に罪を押し付けていたのです。事故が起きてしまったことは仕方ありませんが、その後の嘘は絶対に許されません」

8月24日、東京・霞が関。強い陽射しが降りつける中、怒りに満ちた表情で訴えるのは、愛媛県松山市に住む山本純子さん(37・写真左上)だ。

長男の昌樹さん(当時16・高校1年生・写真上)が、バイク同士の衝突事故で重傷を負ってから1年9ヵ月。一時は、警察の不当な捜査によって「加害者」に仕立て上げられ、「保護観察処分」(有罪)まで受けた。しかし、家族の必死の調査が実って、今年3月、「逆転無罪」に。その歳月は、息子の名誉回復をかけた苦しい闘いの日々だったのだ。

実はこの事故のもう一方の当事者は、愛媛県警松山西警察署交通課の白バイ隊員・H(当時28)だった。

実況見分にあたったのは、白バイが所属する松山西署。「身内」の起こした事故だけに、特に公平で公正な捜査が求めら

れるべきだ。が、現実の捜査は、そんな言葉とはあまりにかけ離れていた。事故は04年11月8日、午後2時20分頃、松山市別府町の信号機のない変則三叉路交差点で発生した。

この日、200ccのスクーターに乗って友人宅へ向かう途中だった昌樹さんは、前方から走ってきた緊急走行中の白バイと衝突。左足首と左手首を骨折する重傷を負い、救急車で病院に搬送された。

衝撃の大きさは事故車の破損状況が物語っていた。昌樹さんが乗るビッグスクーターのフロントフォークは折れ、前輪は完全に脱輪。白バイもフロント周りが大きく破損し、運転手の警察官も右腕を骨折する重傷を負った。双方とも、命に別状がなかったのが不幸中の幸いだった。

一見、見通しのよさそうな事故現場。なぜこのような事故が起こったのか……。

この事故には、偶然にも衝突の一部始終を見ていた目撃者がいた。現場の道路沿いで青果店を営む安藤字氏が振り返る。「サイレンが鳴ったのでなにかと思い店の外に出てみると、目の前の交差点中央に右折しようとしているワンボックスカーが1台停まっており、続いて黒いスク

05年6月30日、松山家庭裁判所で「交通短期保護観察」処分を受けた。これは成人の刑事裁判でいう「有罪」にあたる。家裁は当事者の供述と目撃者の証言を完全に無視し、捜査を鵜呑みにし、処分

を下したのである。

この結果に納得できなかった純子さんは、2週間以内なら「抗告」ができることを知り、自ら調査した現場検証や目撃者の聞き込み結果をまとめて高松高等裁判所

◀8月24日、母親の純子さんは警察庁に「質問状」と「再捜査願」を提出した

警察にしか見えない「痕跡」
理不尽な捜査は事故当日から始まっていた。現場検証に来ていた警察官が、チヨークで道路上に意味不明の2本の白線を引き、写真を撮っていた。それを見た安藤氏は、思わずさう尋ねたという。「この2本線はなんですか？」(安藤氏「白バイのブレーキ痕です」(警官)が安藤氏は衝突の直前、急ブレーキの音を聞いていない。そのため「不思議に思い、何も見えませんか？」と問うと、警官は「警察にしか見えない特殊な痕跡だから、わからないでしょう」と答えたのだ。

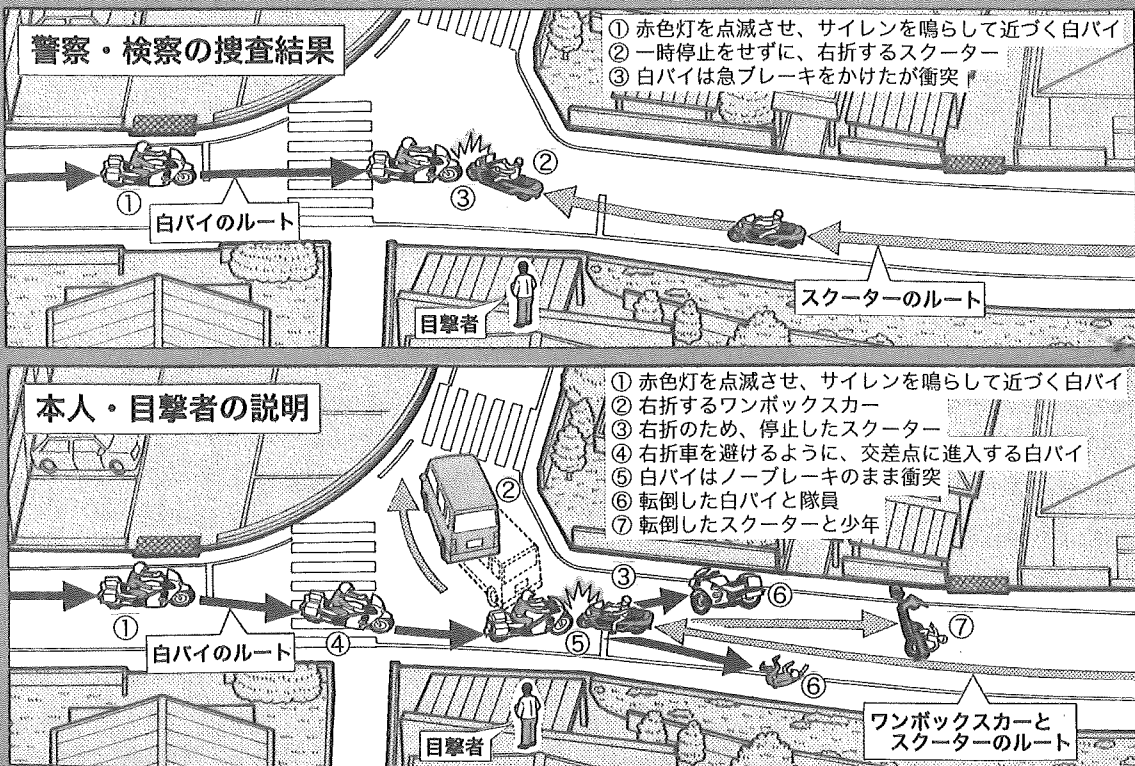


たしかに、最近ではABS(アンチロックブレーキシステム)を採用している車も多く、ブレーキ痕ははっきり残らないケースもある。しかし、この白バイ(ホンダVF1000)には、ABSはない。急制動をかけたなら、路面にはタイヤの黒い痕跡が残っているべきなのだ。翌日、現場を訪れた純子さんも、道路上の白線を、車の通行が途切れたときに這いつくばって見たが、しかるべき痕跡は見当たらなかったという。

「今思えば、警察は事故直後から、自分たち都合のいいストーリーを作ろうとしていたのだと思います。救急車で運ばれたとき、病院には何人もの警官が来ていました。が、ストレッチャーでOT検査室に向かうとする息子に、「お前無免許やっただんじやろ」と突然右へ曲がったんやな、さうじゃろ」と一方的に迫ってきたんです。もちろん息子は無免許ではありませんし当初から自分は停まっていたと言いつづけていました(純子さん)

昌樹さんの「供述調書」は警察、検察台わせて複数あるが、右折しようとしたので、自分も右足をついて止まっていたので、前の車が右折してはなくなったとたん、白いものが自分のほうに覆い被さるようにつづかっていた」と一貫していた。

一方、白バイ隊員の供述は「右折車のことや、衝突直前のことは記憶にない」など、あいまいなものだった。にもかかわらず、事故はスクーターが急に右折し、白バイは急ブレーキをかけたが避けきれなかったために起きたとされ、白バイはその後、「嫌疑不十分」で不起訴処分。昌樹さんは、自身の主張が受け入れられないまま、「業務上過失傷害保護事件」の被疑者として書類送検され、



▲上の図は警察、検察および家裁が判断した事故状況。下の図は、少年と目撃者が主張する事故状況



▲事故17日後に行われた実況見分。警察は強引に衝突位置を特定した

つまり、警察の捜査のみを鵜呑みにした家裁の判断は「公平・公正」とは程遠いと認定されたわけだ。

明かされた「不当捜査」の中身

実は、こうした背景には極めて恣意的な「捜査関係書類」の存在があった。刑事裁判後、初めて刑事記録の一部を見た純子さんは驚きと怒りを覚えた。警察は「昌樹さんのスクーターが停止していた」という証拠はごくごく却下し、あくまでもスクーターが突然右折を開始したことが事故の原因だと決めつけていたのだ。中でも、当初の保護観察処分に大きな影響を与えたのが、愛媛県警科学捜査研究所作成の「鑑定書」だ。ここには、衝突時のスクーターの速度は「時速17キロ」と明記されているが、その計算の根拠となった「スリップ痕」や「質量計算」自体があいまいなもので、そのことは高裁の決定文でも厳しく糾弾されている。

また、警察官が作成した「捜査報告書」の中では、目撃者である安藤氏の証言を根拠から否定。〈安藤氏は山本昌樹の母や祖母と仕事を通じて面識がある〉と、勝手に虚偽の記載をし、それを理由に〈安藤氏の証言の信憑性は乏しい〉(山本車の前にワンボックス車が止まっていたとの実体験と異なる事故状況を創作した可能性がある)とまで書いていたのだ。

少年事件の捜査書類は非公開が前提だ。しかし、「見られないのなら、何を言ってもいいというのか……。善意で捜査に協力した目撃者に対し、あまりに非礼な行為といえるだろう。」この事実を、後に純子さんから知らされた安藤氏は憤る。

「警察は身内を守るためにここまでしますかね。本当に腹が立ちます。私は目撃

したまを話しただけ。山本さんのご家族とは仕事のつながりなどなく、事故直後はスクーターの運転手がどの誰かも知らなかったんです。検察で「山本さんからモノをもらっているのか?」と問われたこともありましたが、これが原因だったんですね。そもそも、私が事故状況を創作する必要がどこにあるんですか」

また、この捜査報告書には、〈家族の異常な捜査に対する関与により、被疑少年に説明を求めるも本人の自主的な説明が得られない状況にあり、全て母親等の意図に沿った内容を申し立てるのみである〉

とも書かれていたのだ。純子さんは、警察庁に提出した「質問状」の中に、その怒りをこう綴っている。

「異常とは、何を根拠にそう言われるのですか。親ならば命をかけて我が子を必死で守ります」

ちなみに、純子さんが情報公開請求で取り寄せた「交通事故情報管理システム・原票照会処理」という警察内部のデータベースには、この事故の「概要」として、次のように記載されていた。

「一当は、三叉路交差点を右折する際、前方の安全確認不十分のまま進行したため、対向直進してきたと当と衝突」

記載されたのは事故の2日後。一当(第一当事者)とは昌樹さんのことだ。警察がハナから昌樹さんを加害者扱いしていたことがわかる。裁判の結果、無罪は認められなかったが、安藤氏の証言や家族の努力がなければ、冤罪のまま泣き寝入りせざるをえなかった可能性が高いのだ。

「異常」という言葉は、本件においてはむしろ愛媛県警が自らへの戒めとして投げかけるべきだったのかもしれない。愛媛県警は、この不処分決定をどう受

け止めているのか。また、被害少年への対応はどうするつもりか。本誌は愛媛県警に今後の対応について質問をしたが、「本件事故は適正に捜査して送致したものであるが、家庭裁判所の決定について評価する立場にない。双方の損害賠償については、保険会社を介して交渉中である」という答えが返ってくるのみだった。

純子さんは厳しい口調でこう語る。

「大ケガをさせられ、自分の言い分はすべて無視され、挙げ句の果てに保護観察まで付けられた息子の苦しみかわかりますか。白バイ隊員は今のところ不起訴のままですが、現在、検察審査会に不起訴不当で訴えています。愛媛県警は再捜査をして、必ず真実を明らかにしてください。そして、このズサンな事故捜査に関わった関係者に、処分を求めたいと思います」

現在、山本さんは警察を相手に民事裁判も検討しているという。

▼目撃者の安藤氏は「停止中のスクーターに白バイが衝突」と証言した



PHOTO 横浜大輔 (P.26右・P.27・P.28下)

イラスト 佳岡広澄